

幼児期の言語獲得におけるオノマトペの役割

著者	中西 一彦
雑誌名	教育総合研究叢書 = Studies on education
号	13
ページ	71-79
発行年	2020-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000581/

幼児期の言語獲得におけるオノマトペの役割

The Effects of Onomatopoeias on the Language Acquisition in Early Childhood.

中西 一彦*

Kazuhiko NAKANISHI

抄 録

オノマトペは日常的に数多く使用されていて、特に感覚的なものを共有したいときにその力を発揮する。オノマトペは幼児語や母親語と共通点があると思われるので、オノマトペは幼児にも親しみやすく、多用されやすいと推察できる。そこで、幼児期の言語獲得において、オノマトペはどのような役割があるのかを文献を通して検証する。結果として、オノマトペは音の印象と抽象的なことばを結びつける役割を果たしていることが明らかになった。

I はじめに

日本では老若男女問わず日常的に数多くのオノマトペが使用されている。オノマトペを表現に取り入れることで、細かいニュアンスや簡単に言い表しにくいことを感覚的に共有できるようになる。オノマトペは動詞のように使われたり、副詞のように動詞などを修飾したりと、様々な形でより正確に感覚を伝える補助をしている。幼児が使うことばの中にも、オノマトペのような表現が確認できる。このことからオノマトペは幼児が言語を獲得する際に感覚とことばをつなぐ手がかりになっていると考えられる。

本稿においては、幼児期の言語獲得の流れ、オノマトペそのもの、そしてオノマトペが言語獲得においてどのような役割を果たすのかを検証する。オノマトペは幼児に親しみのある幼児語と動詞や形容詞といった抽象的な語彙をつなぐことで、語彙の爆発期における語彙獲得の起爆剤としての役割を果たすのではないかと考えている。

II 幼児期の言語獲得の流れ：幼児語とオノマトペ

幼児期の言語獲得にはいくつかの段階がある。幼児はまず初めに特定の意味を持たないことばを発し始め、続いて意味を持つが幼児しか使わない幼児特有のことば、意味を持つ普遍的なことばを順に獲得していく。『子どもとことば』¹⁾ (1982) で岡本夏木は次のように述べている。

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

子どもに初語らしいのがあらわれはじめるのは、一般に10か月から誕生すぎ頃のあいだが多いようだが、そのときから、組織的な言語獲得が急激にあらわれてくる時期（満2歳前後）までには、かなりの時日を費やしている。（pp. 123-124）

このように幼児期の獲得語彙は緩やかに増加していくのではなく、ある段階で爆発的に語彙を増やす時期があるということがわかっている。また同書で岡本(1982)²⁾は、幼児の語彙爆発期までにおける語彙獲得にかかる所要時間についても大きく分けて三段階あると言及している。

(1) 喃語としての自発的発声として出発したものが、意味化し、模倣が可能になる場合（主として10か月頃まで）。

(2) 模倣的に発生した語が、自発的使用にいたる場合（10か月頃から1歳2か月頃まで）。

(3) 模倣的発声と自発的発声とが同時形成されることが可能になる場合（1歳2か月頃から）。

（pp. 132-134）

幼児は成長していくにつれて、ことばを聞いてから獲得するまでにかかる時間が短くなっていく。この模倣的発声と自発的発声が同時形成されるという要素が、語彙の爆発期の特徴の一つであるといえるだろう。両発声が同時形成され、一つの単語を獲得するまでにかかる時間が短縮されることによって、幼児は短時間でたくさんの語彙を吸収できるようになる。このように幼児はある段階で急速に語彙を増やしていくが、幼児がインプットする大人からの呼びかけ方や呼びかけることばにより幼児の反応に違いがみられる。

1.1 母親語

幼児は大人が発することばを模倣しながら言語を獲得していく。この時、大人が幼児に向かって話しかけることばは大人同士の会話で使用していることばと異なることが発見された。『0歳児がことばを獲得するとき』³⁾ (1993)において、正高信男は Motherese=母親語という大人から幼児に向かって使われることばを紹介している。

ファーガソンという人は、六つの異なる言語文化圏で母親の赤ん坊への語りかけの比較検討を行った結果、それぞれはお互いにまったく交渉がないにもかかわらず、いずれにおいても母親の語りかけには共通の特質があることを発見して、母親語と命名したのであった。つまりごくふつうにほかの成人に話をするときはまったく違って、おとなが赤ちゃんに話しかけるときには、(1)ことさら声の調子（高さ）を高くするか、(2)またそれと同時に声の抑揚を誇張する傾向が顕著となる、というのである。（p. 102）

つまり、母親語は幼児が大人から、特に親から呼びかけられるときに一番よく耳にすることばの一つである。また、ファーガソンの比較検討対象外であった日本語文化圏においても、成人に話しかけるときの幼児に呼びかけるときで声の高さと抑揚が変化する母親語の特徴がみられたという。(正高 pp. 103-105) ⁴⁾

幼児の母親語に対する反応と、母親語ではない呼びかけに対する反応に違いがあることも確認された。正高 ⁵⁾ (1993) によると、幼児に話しかける際に母親語を使用せず、成人に話しかけるようにことばをかけた場合、幼児は 20 パーセントぐらいの確率で大人と同じメロディーラインで返答するが、母親語で話しかけた場合、60 パーセントを超える確率で大人の発したメロディーラインを真似したという結果がある。親が語りかけた後の反応を見ているので、親が幼児の発したメロディーラインを真似ているとは考えにくい。したがって、母親語を聞いた幼児がそのメロディーラインをなぞっていると考えるとよいという結論が出ている。(pp. 106-107)

大人が幼児とことばを通してコミュニケーションをとる場面では、大人同士が使うことばと異なる母親語ということばが使われており、大人は幼児に向けて無意識のうちに母親語で話しかけている。母親語は幼児がより反応を示しやすい音の特徴をもっているため、ことばを模倣するきっかけとなりやすく、幼児の言語獲得を手助けしていることがわかる。また、幼児語とオノマトペの両方ともに声の調子や抑揚に特徴があるので、母親語に強く反応を示す幼児の耳につきやすく、真似をしやすい要素があるのではないかと考えられる。

1.2 幼児語

母親語が声の調子や抑揚に特徴を持ち、幼児に呼びかける際に顕著に表れることばであるのに対し、幼児語は大人が幼児に語りかけるときに使われる特異な語彙を意味する。大人と幼児の間で話す場面では動詞や名詞が幼児語に変換される現象がよく観察される。『オノマトペの謎』⁶⁾ 窪菌晴夫ほか (2017) によると、幼児語または赤ちゃんことばとは、役割や見た目から連想する音を基にしたオノマトペに似た大人と幼児のコミュニケーションで使われることばのことである。日本語では名詞ならば車をさす「ぶうぶう」や、犬をさす「ワンワン」、動詞ならば這うことを表す「ハイハイ」や、寝ることを表す「ねんね」などが存在する。大人が幼児語で話しかけた結果、幼児が真似をして幼児語で返しているのか、幼児が幼児語で話しているから大人も幼児語で答えているのかは定かではないようだ。(pp. 121-123)

以上から幼児語は母親語のように音に特徴があることばであると考えられる。母親語でもみられたように幼児が幼児語のメロディーラインに反応を示しやすいため、大人も幼児とコミュニケーションをとれているという実感がわきやすく、幼児に向かって幼児語を使おうとする理由になるように思われる。

1.3 幼児語とオノマトペの比較対象

複数のオノマトペが幼児語として形をそのままに使用されているため、オノマトペと幼児語は共通点を持ち、またオノマトペではない幼児語とオノマトペの間にも共通する特徴が確認されるが、オノマトペと幼児語では使用方法に大きな違いがある。まず幼児語とオノマトペの共通点であるが、幼児語は動きや見た目を特徴的にとらえたことばであるため、擬音語や擬態語を意味するオノマトペと同一の表現が存在するのは不思議なことではない。しかし、「ハイハイする」のような動詞の幼児語形など直接オノマトペから発展したものではない幼児語にもオノマトペとの共通点がみられる。オノマトペと幼児語をモーラによって分類することで、それぞれの音の特徴が明瞭になる。モーラとは等時的なリズムの単位で拍を意味する。(『新明解国語辞典』⁷⁾ (2019) p. 1498)

窪菌⁸⁾ (2017) によるとオノマトペと幼児語には以下のようなリズムパターンが確認できたという。

赤ちゃん言葉のリズムは、非反復形 (3 モーラ) の場合には…[長短]の構造であり、反復形 (4 モーラ) の場合には…[長長]の構造である。…4 モーラは反復形が多いがオノマトペの中の擬音語には…[長長]の 2 音節語が多く、擬態語には…[短短短短]の 4 音節語が比較的多い。…このように考えると、赤ちゃん言葉とオノマトペはリズム構造もよく似ていることがわかる。…一方、3 モーラのオノマトペの…語形は、同じ 2 音節構造ながら、[短長]という構造を持っている。…赤ちゃん言葉にはまったく出てこない構造である。(pp. 134–136)

幼児語とオノマトペは音が反復する構成である場合、リズムに共通点が生まれるが、オノマトペの中には幼児語にないリズムの特徴をもつものもある。しかし、基本的に幼児語の音声的特徴はオノマトペの特徴にあてはまるといえるだろう。

一方、オノマトペと幼児語はその用法に決定的な違いがある。窪菌⁹⁾ (2017) によると、

文の中での使い方 (品詞) はオノマトペと赤ちゃん言葉の間に違いが見られる。オノマトペは大人の言語において副詞として使われることが多いが、赤ちゃん言葉は名詞が主流である。(p. 125)

幼児語は、「ねんねする」や「ハイハイする」など語尾に「～する」というような表現をつけたし動詞の形として使用されることがたびたびある。この幼児語の動詞形への変化は幼児、大人を問わず幼児語を使う際にみられる。

幼児が動詞としてオノマトペのような幼児語を使う理由はやはり、獲得語彙の少なさによるものであろう。『ことばの発達謎を解く』¹⁰⁾ で、今井むつみ (2013) は次のように述べている。

動詞は…覚えたとしても新しい状況で使うことが難しい。でも動詞がないと文をつくれぬ。このような時、子どもは知っている名詞、間投詞、オノマトペなどを動詞にするのです。これは子どもが言語を獲得していく上でとても意味がある、大事なことです。(p. 107)

幼児は獲得済みの数少ない単語だけで表現する必要がある。そのため、このオノマトペに似た幼児語の動詞形への変化が起こると考えられる。一方で既にたくさんの動詞を獲得している大人は、動詞に限定的な意味を持たせるために、オノマトペを副詞として使う用法を頻繁に用いるのである。よって大人が言語表現するとき、オノマトペが名詞として使われることもあるが、主に修飾語としての役割を果たしているため、オノマトペと幼児語は基本的な使用方法が違ふと考えられる。

このようにオノマトペと幼児語は音声的構造に共通点を持つが、文法的に相違点を持つ。

III オノマトペの獲得、使用

幼児は言語を獲得する段階でまず幼児語を獲得し、それに続いて幼児語と音やリズムに共通点を持つオノマトペを順に獲得していくと思われる。特定の動詞や形容詞を獲得する前になぜオノマトペを獲得するのか、それについてはオノマトペの音が関係しているだろう。人間には年齢を問わず、発されたことばの音の強弱や抑揚で意味を判断する能力が備わっていると考えられている。『思考と行動における言語』¹¹⁾S. I. ハヤカワ、大久保忠利訳 (1985) によると、

人に危険を知らせるに十分なほど声が大きければ、どんな音声を発しようとかまわぬ。必要な感覚を伝えるのは叫び声の大きさと調子に表出された恐れ感情であって、ことばそのものではない。同様に、鋭く怒った調子での命令は、同じ命令を単調な声で出すよりも、一般に、より早い結果を得る。すなわち音声の質自身が、使われた記号とはほとんど無関係に感情を表出する力を持っている。(p. 88)

声や音の印象がある程度の意味を持っている。つまり、オノマトペは感覚的で曖昧なことを伝えることと、ことばで何かを明確に言い表すことの橋渡し役をしていると考えられる。オノマトペとは、音の印象で意味を推測できるという人間の能力を同じ言語圏で共有することができる、ある程度共通のことばにまとめたものであるとも言えるのではないだろうか。

1.1 オノマトペの構造

オノマトペには基本構造があるという。『オノマトペ 擬音語・擬態語の世界』¹²⁾ (2019) において小野正弘は、オノマトペには中核があり、その語末や語中に促音や撥音などを加えることでより細かなニュアンスを表現することができると考えられると述べている。撥音が入ると動作が瞬間

的に行われたことを強調し、促音が入ると動作に余韻が残っていることをほのめかし、中核に「り」がついて終わると動作をひとまとまりで表現することになる。また、中核を反復することで動作が連続していることを伝えることができる、というのである。(pp. 22-25)

また、日本語のオノマトペは子音が大きく印象を与えると考えられている。『オノマトペの謎』¹³⁾において浜野祥子はオノマトペの子音が与える印象について次のように分析している。pは発音時に空気の緊張を保つため破裂するような様子を印象付けさせる。また、濁音化した子音(b, d, g, z)は濁音化前の子音(p, t, k, s)より「強い力, 重いもの」という意味に結びついている。(pp. 12-13) すなわちオノマトペの子音の音の響きがそのままオノマトペの印象につながっている。オノマトペの子音が質感や重量感を印象付けるのに対し、オノマトペの母音の違いは大きさをほのめかしているという傾向がみられるというのである。『五感を探るオノマトペ』¹⁴⁾ (2019)において坂本真樹はオノマトペと母音の関係を以下のようにまとめている。調音音声学的観点から分析すると、母音を発声するときの副口腔空間の大きさの違いが大きさのイメージと関連しており、口腔を拡張して発声する音は大きいものという印象を抱きやすく、逆もまたしかりである。(p. 16)

幼児もオノマトペを発音する際に自分の口を動かすので、感覚的に母音から対象物の大小の関係を認識できると思われる。

1.2 オノマトペが表現するもの

オノマトペは抽象的なものを仔細に表現することができるので、感覚的なものを言語化する手段として使われる。ここでは感覚的で抽象的なものの例として動詞を分析する。動詞一つに対し、その動詞に関連するオノマトペは数多く存在する。このうち「笑う」と「歩く」という動詞で検証を試みる。『新明解国語辞典』¹⁵⁾ (2019)によると、「笑う」とは「うれしさ・おかしさなどをおさえきれず、目を細めたり口許をゆるめたり時には声をあげたりしてその気持ちを表す」(p. 1637)ことで、「歩く」とは「足を交互に前へ出して、進む」(p. 48)ことであると定義されている。笑うという動作に声を上げることが必要なのか、笑っている表情を作るときに目や口許を動かす範囲に決まりがあるのか、そして歩くという動作に速さや手の振り方に程度の決まりがあるのかということが、抽象的だといえる。ここで、五味太郎の『言葉図鑑② ようすのことば』¹⁶⁾ (1985) (pp. 26-36)より、「笑う」、「歩く」という動詞に関係するオノマトペを抜き出すと以下ようになる。

笑う：にこにこ けらけら にやにや にっこり くすくす へらへら うふうふ
歩く：てくてく とぼとぼ のろのろ せかせか よちよち すたすた ぞろぞろ

このように一つの動詞に対して、ようすを表すオノマトペは多数存在しており、動詞はオノマトペよりも広い範囲の抽象的な動きを総称していることがわかる。動詞の方がオノマトペより指し示す対象が広いので一見利便性が高いように思われるが、それに反して動詞が複数の細かな様子を包

括しているため、言語獲得の段階で動詞の対象範囲をつかむことは容易ではないと考えられる。

1.3 オノマトペの獲得

動詞のように曖昧性があり、たくさん含みを持っていることばと比べて、オノマトペは意味が限定的であるため、その分、存在数は多い。オノマトペはそれぞれに細かな違いがあり、多数存在しているため、それらを獲得することは困難であるように思われるが、幼児はその違いを無理なく把握できるという。

幼児の音声認識について『オノマトペの謎』¹⁷⁾ (2017) で今井むつみは以下のような結果を紹介している。

まだほとんどことばを知らない11か月の時点で、赤ちゃんは人が発する音声が何かを指し示すものだと思っている。しかも、「音に感覚的に合う」モノが単語を指し示す対象であると思っている。だから単語の音声が音に合わないモノと対応づけられると違和感を覚える。…人に注目するのか、動き方に注目するのか、移動する方向に注目するのかという曖昧性のある中で、オノマトペの音は子どもに自然に場面の中で注目すべき要素を教えるのである。(pp. 110-114)

このことから、幼児はオノマトペの音とそれが表現するものが一致するかどうかを認識する能力を生得的に備えていて、オノマトペに似た音を特徴に持つ幼児語を通してオノマトペを獲得していくと考えられる。

IV 語彙の爆発期におけるオノマトペ:オノマトペからの語彙獲得

幼児は幼児語から幼児語と共通点の多いオノマトペを順に獲得していった延長線上で、オノマトペで表現されていた抽象的な事柄、より広い意味を持つ品詞を獲得していく。ここでオノマトペが幼児期の語彙爆発に大きく関与していると思われる。

前述のように幼児語ではオノマトペを主に名詞として扱っていることが確認されたが、この幼児語でもよくみられるオノマトペは大人が使用する言語と同じような特徴を持っているため、オノマトペが言語獲得の補助をしていると考えられる。窪菌¹⁸⁾ (2017) によると、幼児語とオノマトペに見られた共通点であるそれぞれの音声的特質は、

オノマトペと赤ちゃん言葉にだけ見られるものではなく、大人の言語にも引き継がれている。大人の言語はオノマトペや赤ちゃん言葉には見られない多様な音韻構造(リズム構造、アクセント型)を示すが、中心的な構造はオノマトペ・赤ちゃん言葉と同じである。オノマトペと赤ちゃん言葉が、

大人の言語の骨格を作っていると言って過言ではない。(p. 142)

このことから、幼児語からオノマトペ、そしてそれら両方から大人同士の会話で普段使用している明確な言語へと発展していくといえる。すなわち、幼児は感覚的に利用していたオノマトペを通して動詞や形容詞などを習得していくと考えられる。

さらに、『オノマトペの謎』¹⁹⁾で今井 (2017) はオノマトペの効果について次のように述べている。オノマトペは、

たくさんの要素がありすぎる場面で、単語が指し示す部分に子どもが注目するのを助け、その意味を見つけやすくする。動詞や形容詞は、目の前に見える対象そのもののごく一部を切り取ったものが意味になる。動詞を学習するときには、動作主、動作対象、道具、背景などたくさんの要素から成る場面で動きや行為にだけ注意を向けなければならないし、形容詞はモノそのものではなく、触覚、模様、大きさ、重さなど、特定の特徴だけを取り出さなければならない。オノマトペはこのようなことを子どもに気づかせる。(p. 117)

オノマトペは意味する対象が限定的である。オノマトペが何を指し示すかという情報を集積することで、その動詞や形容詞の本質を抽出することが次第にできるようになっていくと考えられる。

したがって、オノマトペは言語獲得において抽象的なものを分類し単語が何を対象とし、どういったものを抽出したものなのかを感覚的につかませることができるため、オノマトペを獲得し、オノマトペを自発的に使うことで、語彙の爆発を補助していることがわかる。

V おわりに

以上のことから、幼児が言語を獲得するにあたり、オノマトペは音の印象と抽象的なことばを結びつける役割をもっていると結論づけられる。特に動詞や形容詞など数多くの情報の中から、ある特定のものや特徴、動きを意味することばの使い分けを覚える段階で、オノマトペの強みを発揮する。オノマトペは幼児語と同じような音の響きを持ち、母親語のように抑揚が顕著に表れるという特徴があり、幼児にとって親近感を持ちやすい。オノマトペが動詞として利用されることで抽象的である動詞の獲得に貢献していることは確認された。しかし、大人にみられるオノマトペの副詞としての利用が幼児期には観察されない。その後、幼児がどのようにオノマトペを副詞として使用しだすかという研究はまだ十分でなく、今後の課題としたい。

引用文献・参考文献

- 1) 岡本夏木『子どもとことば』岩波新書, 123—124 頁, 1982
- 2) 岡本夏木『子どもとことば』岩波新書, 132—134 頁, 1982
- 3) 正高信男『0 歳児がことばを獲得するとき』中公新書, 102 頁, 1993
- 4) 正高信男『0 歳児がことばを獲得するとき』中公新書, 103-105 頁, 1993
- 5) 正高信男『0 歳児がことばを獲得するとき』中公新書, 106-107 頁, 1993
- 6) 窪菌春夫 編『オノマトペの謎』岩波書店, 121-123 頁, 2017
- 7) 山田忠雄, 柴田武ほか『新明解国語辞典第 7 版』三省堂, 1498 頁, 2019
- 8) 窪菌春夫 編『オノマトペの謎』岩波書店, 134-136 頁, 2017
- 9) 窪菌春夫 編『オノマトペの謎』岩波書店, 125 頁, 2017
- 10) 今井むつみ『ことばの発達の謎を解く』ちくまプリマー新書, 筑摩書房, 107 頁, 2013
- 11) S. I. ハヤカワ, 大久保忠利訳『思考と行動における言語』岩波書店, 88 頁, 1985
- 12) 小野正弘『オノマトペ 擬音語・擬態語の世界』角川ソフィア文庫, 22-25 頁, 2019
- 13) 窪菌春夫 編『オノマトペの謎』岩波書店, 12-13 頁, 2017
- 14) 坂本真樹『五感を探るオノマトペ』共立出版, 16 頁, 2019
- 15) 山田忠雄, 柴田武ほか『新明解国語辞典第 7 版』三省堂, 1637 頁, 48 頁, 2019
- 16) 五味太郎『言葉図鑑② ようすのことば』偕成社, 26-36 頁, 1985
- 17) 窪菌春夫 編『オノマトペの謎』岩波書店, 110-114 頁, 2017
- 18) 窪菌春夫 編『オノマトペの謎』岩波書店, 142 頁, 2017
- 19) 窪菌春夫 編『オノマトペの謎』岩波書店, 117 頁, 2017

Abstract

There are a lot of onomatopoeias frequently used on a daily basis. Onomatopoeias are especially effective when sharing vague senses. Onomatopoeias have some common points with infant languages and motherese. Therefore, it can be inferred that onomatopoeias are easy for infants to use; thus, infants frequently use onomatopoeias. This paper examines the role of onomatopoeias in language acquisition in early childhood through literatures. In conclusion, onomatopoeias play a role in linking an impression of sounds with abstract words.